

季刊

考古学 155

2021.4

土器研究が拓く新たな縄文社会

Edited by 阿部芳郎



◆最近の発掘から

ユーラシア後期旧石器の最古段階と
酷似する石刃石器群

長野県佐久市 香坂山旧石器遺跡

遺跡遠景（南から）
(大場正善氏撮影)

円筒形建物の位置が1997年調査地点。
2020年調査はその1cm左下。奥は浅間山。



長野県と群馬県の県境付近の安山岩原産地である八風山に立地する。大型石刃、小石刃、そして定義的な斜軸尖頭器がセットとなり出土した。ユーラシア後期旧石器の最古段階と酷似する石刃石器群であり、列島の石刃の起源が明らかとなった。現生人類のユーラシア北回り拡散の流れが、3万6千年前までに列島に到達したことを示す可能性がある。



石器出土状態（西から）
下に石刃、左半に尖頭形剝片がまとまる。
壁の白色層は始良Tn火山灰の純層。



大型石刃の出土状況（東から）
長さ10cm以上、幅3cm以上の大型石刃
が散らばる。

長野県
香坂山旧石器遺跡



彫器状石核（小石刃核）出土状況



出土石器集合（大木文彦氏撮影）

上段が尖頭形剝片、下段左から石斧、大型石刃3点、彫器状石核、小石刃。



ユーラシア IUP 石器群と関連する遺跡の分布

列島最古の石刀石器群を求めて

長野県佐久市香坂山旧石器遺跡 こうさかやま

國武貞克

奈良文化財研究所

1 遺跡立地と概要

香坂山遺跡（長野県佐久市）は、長野県と群馬県の県境付近に位置する八風山（標高1,315m）の山中の標高1,140mの尾根上に立地する。八風山の南麓には黒色安山岩という良質な石器石材が、崖錐性堆積物に含まれて豊富に沢に洗い出されており、旧石器時代と縄文時代の石材原産地遺跡が立地する。後期旧石器時代初頭の石刃生産地点である八風山II遺跡や、縄文時代草創期の大型石槍製作遺跡である同I・VI遺跡および下茂内遺跡が著名である。香坂山遺跡はこれらが発掘調査された後に1996年に長野県教育委員会により発見され、1997年に長野県埋蔵文化財センターにより初めて発掘調査が実施され、2001年に発掘調査報告書が刊行されていた。中型剝片を主体とする4ブロックが地表下5.5mより面的な発掘調査により検出され、そこから約40m斜面下方では幅2mの限定的なトレンドから、それとは様相の異なる長さ10cmを超える大型石刃が2点とそれが剝離された大型の石刃核が1点出土していた。放射性炭素年代分析から、八風山II遺跡と同じく約3万6千年前とされている。

2 調査の背景

日本列島の後期旧石器時代は、3万8千年前から3万7千年前の間に列島の中期旧石器文化の系譜にある横打系の小型剝片による台形様石器群が成立することで開始したことが、東京大学の佐藤宏之教授の

研究から明らかにされている。その一方で、日本列島の後期旧石器文化を特徴づける石刃石器群は、八風山II遺跡にみられるように3万6千年前にはすでに列島に現れている。しかしながら日本旧石器研究では、この石刃石器群の起源について長く論争があり決着をみていない。列島自生説や収斂進化説、大陸伝播説など様々な見解が示されてきたが、とくに2015年以降の最近5年は、ユーラシア大陸の初期後期旧石器時代（IUP期）の石器群と、最古の石刃石器群である八風山II遺跡の石刃製刺突具が類似しているのではという議論が起きていた。しかし八風山II遺跡では肝心の石刃生産技術がユーラシアIUP石器群と一致しないとする反対意見も出されるなど、やはり決着し難い状況にあった。

そこで、筆者は同じく八風山の山中にある香坂山遺跡に着目した。1997年に長野県埋蔵文化財センターにより発掘された香坂山遺跡の大型石刃が2点のみではあるが、八風山II遺跡と異なりユーラシアIUP石器群の大型石刃と大きさや形態が類似すること、そして同じトレンチから出土した黒曜石製の小石刃核が、IUP期のレヴァントから中央アジアを経て北アジアに分布する横断面取石核の範疇で理解できることに着目した。片鱗のみではあるが香坂山遺跡には、八風山II遺跡とは異なりユーラシアIUP石器群と共に通する石刃石器群が埋没しているのではないかと予測されたのである。これを検証するために、1997年長野県調査により大型石刃が発掘されたトレンチ周辺の国有林と高速道路施設地において、2020年8月から9月に学術目的の発掘調査を実施したのである。

3 調査の経過と成果

調査は科学的研究費を使用し、7カ所の調査区計約135m²を3次に分けて発掘した。調査団など調査組織を形成せず、筆者を届出上の担当者とし、堤隆氏（浅間縄文ミュージアム）と須藤隆司氏（明治大学黒耀石研究センター）を調査指導者として、大竹憲昭氏をはじめとする長野県埋蔵文化財センターの皆様や多くの関連分野の専門家に支援を頂き実施した。地表から約2mは浅間山に由来する軽石層が堆積し、その下に30cmの斜面崩落土層にパックされた3万年前の始良Tn火山灰層の紳層が20cm堆積し、その50cm下位を中心に約

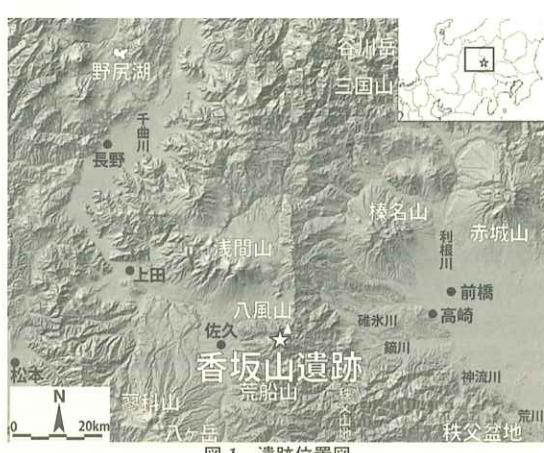


図1 跡跡位置図

800点の石器が出土した。まず8月前半の第1次調査では、黒曜石製の小石刃が出土した。隣接する1997年長野県調査区で出土していた横断面取石核の範疇で理解できる小石刃核と関係すると考えられた。続く8月後半の第2次調査では、黒色安山岩による大型石刃と小石刃、そして尖頭形剝片が出土した。尖頭形剝片は求心剝離石核から規格的に生産された定義的な斜軸尖頭器であった。この第2次調査により、香坂山遺跡の基本組成が大型石刃+小石刃+尖頭形剝片となることが判明した。大型石刃と小石刃が出土することは事前に予測していたが、これに定義的な斜軸尖頭器が加わることはまったく予想していなかった。これが加わったことにより、大型石刃+小石刃+尖頭器を基本とするユーラシアIUP石器群の石器組成と一致する可能性が示唆されたのである。続く9月の第3次調査では、大型石刃と尖頭形剝片の製作地点が隣接して検出され、大型石刃の製作跡に含まれて、小石刃の製作も行われていた。小石刃生産は大型石刃を石核素材としており、その結果として大型石刃素材の彫器状石核が残されていた。驚くべきことにこの彫器状石核こそが、ユーラ

り上げるとともに、包含層の掘削廃土は全量回収して2mmメッシュで水洗選別し、小石刃片や多数の炭化物を回収した。回収した炭化物試料は年代測定や樹種同定に供されている。

4 発見の意義

23年前の調査で片鱗が見えていた資料を再評価し、ユーラシアおよび日本における後期旧石器時代開始期の研究の進展を踏まえて、新たな視点から学術目的の発掘調査を実施した。これにより、ユーラシア後期旧石器時代の最古段階と酷似する石刃石器群が、日本列島に存在したことが判明したのである。岩宿発見から70年以上の歴史をもつ日本旧石器研究において未知のインダストリーが発見されたこと自体稀有なことであるが、それが長らく懸案であった石刃石器群の列島最古の姿であったという点は特筆すべき成果といえるだろう。今後詳しい比較検討が必要となるが、細部に至る両者の類似性から、列島における石刃石器群の起源はユーラシアIUP石器群に求められ、その系譜を引く石器群が大陸から流入してきたと評価することができるだろう。その共通点の多さから移住を伴う伝播を想定することが自然と思われるが、調査にとりかかったばかりの現時点ではそこまで断言することは難しいかもしれない。

ところでユーラシアIUP石器群の広がりは、現生人類の拡散の証拠として理解されている。4万7千年前以降に中東のレヴァント地方を発した現生人類の北回り拡散集団が、天山-パミール地域を中心とする中央アジア西部においてユーラシアIUP石器群を自らの技術として取り込んだ。それが4万5千年前までにアルタイ山麓を中心とする中央アジア東部からモンゴルおよびバイカル湖周辺の北アジアに展開し、4万1千年前までに東アジア西部（中国寧夏回族自治区）に入ってきたことまでは判明している。そこから東へのユーラシアIUP石器群の展開はこれまで不明であったのだが、ユーラシア最東端といえる日本列島中央部において香坂山遺跡にその足跡を確認したわけである。現生人類のユーラシア東進の流れが朝鮮半島を通じて日本列島に、3万6千年前までに到來したといえるであろう。そしてすでにそれまでに成立していた台形様石器群と合流して一体化し、3万5千年前までには日本列島の後期旧石器文化が成立したといえる。

このように香坂山遺跡の2020年学術調査により、列島最古の石刃石器群がユーラシア後期旧石器の最古段階と共通することが判明し、列島の後期旧石器文化の形成過程がみえてきた。その当初からユーラシア旧石器文化のダイナミズムに組み込まれていたといえる。日本旧石器研究にとって、新たな局面が到来したといえるだろう。この重要な遺跡をさらに深く究明するため、今年も発掘調査を実施する予定である。

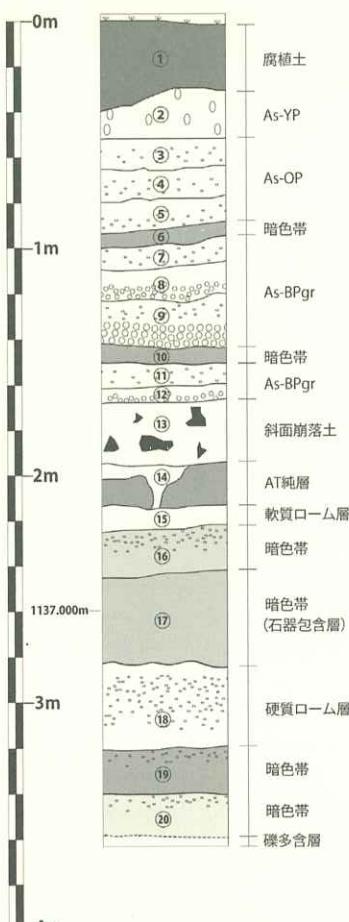


図2 基本層序